

子どもたちに生きる力を育む教育（まとめ）の骨子

	現 状	課 題	今後の教育の方向性	具 体 的 提 言
I	自己探求へと導く (1) 子どもたちは遊ぶことが少なく、受験競争の激化等は自我の確立を困難なものにしている。 (2) 子どもたちは真の自分自身と出会えていない。 (3) 思春期の子どもたちは「自分とは何か」という「自分さがしの旅」をしている。	(1) いかにより子どもたちを自己探求へと導くか。 (2) 自我の確立をいかに促すか。 (3) 自己概念の形成をいかに促すか。	(1) 子どもたちに、自己を見つめ、自分の生き方を考える「ゆとり」を持たせる。 (2) 子どもたちの内面を理解し、自我の確立を促す。	○ 生き方を考えさせる機会と場の充実 ○ 自己発見を支援する教育活動の実施 ○ 読書活動の促進 ○ 教育相談の充実 ○ 自己実現を目指した進路指導の充実
II	豊をか促す人間関係づくり (1) 今の若者は希薄で相互に干渉しない人間関係を好む。 (2) いじめを見ても子どもたちの人間関係や信頼関係の希薄さが分かる。 (3) 異年齢集団との人間関係が少ない。 (4) 震災を通して、助け合い支え合うことや思いやりの心の大切さを学んだ。	(1) 豊かな人間関係をいかに築くか。 (2) 情報化社会の特質を踏まえた教育はどうあるべきか。 (3) 異年齢集団との人間関係づくりをいかに深めていくか。 (4) 震災から学んだ教訓をいかに生かしていくか。	(1) 相互に尊重し合った交流を通じて人間関係を豊かにする。 (2) 異年齢集団との交流を促し、グループ・リーダーの養成を図る。 (3) 震災の教訓を「共に生きる」社会づくりに生かす。	○ 異年齢集団交流プログラムの立案と具体化 ○ 子どもたちの学校外活動の促進 ○ 学社融合の視点に立った体験活動の具体化 ○ 国際交流活動の推進 ○ 福祉教育の推進 ○ 子どもたちによる「震災から学ぶシンポジウム」や弁論大会の開催 ○ いじめ対策の推進 ○ 人権教育の推進
III	生極きの構えとをへ培う積 (1) 子どもたちは死を実感としてとらえにくくなっている。 (2) 子どもたちに感動体験が少なくなっている。 (3) 震災を通して、今生きていることの喜び、人間の価値とその存在の尊さを改めて確認した。	(1) 生きること、命の大切さをいかに感得させるか。 (2) スポーツや芸術文化における感動体験をどのように人間形成に生かすか。 (3) 子どもたちにどのように感動と夢を与えるか。 (4) 震災から学んだ教訓を生かして「生きる力」をいかに育むか。	(1) 命の大切さを感得させ、よりよく生きること考えさせる。 (2) 感動や夢を与え、生きる目標を持たせる。 (3) 自ら命を絶つことは決してあってはならないことを理解させる。 (4) 震災の教訓を、たくましく「生きる力」の育成に生かす。	○ 感動や夢を与える事業の展開 ○ 優れた指導者による部活動指導や指導者研修の実施 ○ 性教育の在り方の検討 ○ 生と死を考える教育・宗教的情操を培う教育の実施 ○ 人間教育の視点に立った新たな防災教育の推進
IV	個創が生ずる学校教育を (1) 子どもたちの「生き方」の選択には画一的傾向が見られる。 (2) 子どもたちは自主性や自発性を発揮しにくくなっている。 (3) 部活動の指導において、子どもたちの自主・自律の精神の発達を阻害している傾向が一部に見られる。 (4) 学校教育においては異質なものを排除する傾向がある。 (5) 学校と家庭との連携・協力が不十分である。	(1) 中学校の進路指導をいかに充実させ、高校入試をどのように改善するか。 (2) 子どもたちの自発性・自主性の成長をいかに促すか。 (3) 学校教育において多様なものを受け入れる態勢をいかにつくるか。 (4) 学校と家庭、中学校と高等学校との連携をいかに図るか。	(1) 「新しい学力観」に基づいて、高校入試の改善を図る。 (2) 教師は子どもたちの成長を「見守る」とともに、きびしきを持つ。 (3) 自分で判断し行動していく人間に育てる。 (4) 多様なものや個性的なものを受け入れる寛容な心を育てる。	○ 新しい高等学校教育の創造 ○ 過度の受験競争の緩和等を目指した高等学校入学者選抜の在り方の検討 ○ 中学校と高等学校との連携 ○ 部活動の在り方の検討 ○ 許容度の高い学校教育の推進 ○ 開かれた学校づくりの推進
V	家と庭のにおい深き (1) 父親の存在感が希薄である。 (2) 世の中の基本的なことを十分教えていない。 (3) 家族の中で子どもたちが自分を出せない。 (4) 家庭において子どもたちの生活は孤立化している。	(1) 父性原理と母性原理の調和をいかに図るか。 (2) 「生きる力」の基礎的な資質や能力を家庭においていかに培うか。 (3) 親と子のきずなをいかに深めるか。 (4) 親が思春期にある子どもについての理解をいかに深めるか。	(1) 父親の家庭教育への積極的参加を促し、父性原理と母性原理のバランスをとる。 (2) 子どもたちの内面を理解するとともに、子どもの壁となる。 (3) 人間が生きていく上で基本的なことを教える。 (4) 学校・家庭・地域社会が相互に連携を図り、問題行動の予防や解決に努める。	○ 親子共同の勤労体験事業の実施 ○ 親の啓発活動の推進 ○ 子育て支援の長期プランの策定 ○ 祖父母・親・子どもによる三世代ふれあい地域活動の展開 ○ 地域における子育ての共同化の促進
VI	子供どてち社の成長を長つに (1) 世の中の価値観が多様化している。 (2) 豊かな社会において自分をコントロールできない。 (3) 情報化により現実感覚が混乱している。 (4) 国際化にもかかわらず円滑なコミュニケーションができない。 (5) 地域社会の教育力が低下している。	(1) 価値観が多様化し、生涯学習の必要性がいわれている現代社会における教育はどうあるべきか。 (2) 豊かな社会における教育はどうあるべきか。 (3) 社会の変化に対応した教育はどうあるべきか。 (4) 地域社会の人々が子どもたちの成長にいかに関わるか。	(1) 多様な価値観や生き方を認め合う。 (2) 教育の質を高める。 (3) 情報化に対応し、情報活用能力とともに、情報選択能力を育てる。 (4) 国際化に対応し、豊かなコミュニケーション能力を育む。 (5) 地域社会の人々が子どもたちの成長を見守り、関わっていく。	○ 県教育委員会制作のテレビ番組の放映 ○ 生徒によるテレビ・ラジオ番組の制作 ○ テレビ番組の内容の自主規制への働きかけ ○ 情報化に対応した教育の推進 ○ 国際化に対応した教育の推進 ○ 地域の教育力の活性化の促進 ○ 地域における子どもの文化活動の促進
VII	子援助助もすたるち教師成と長なる (1) 教員採用候補者選考試験が知識本位となっている。 (2) 個々の教師の指導だけでは限界がある。 (3) 教師に心を開くことにためらいを感じている子どももいる。 (4) 学校が社会から孤立化している。 (5) 学校は自己完結しており、学校間の連携ができていない。	(1) 教員採用等をいかに改善・工夫すべきか。 (2) 教職の専門性をいかにとらえ、研修内容をいかに改善すべきか。 (3) 教員の意識改革をいかに図るか。教員の生涯設計についてどのような観点が重要か。 (4) 中学校と高等学校、高等学校と大学との連携はいかにあるべきか。	(1) 人間性豊かな人材の確保に努める。 (2) 学校教育に専門家を入れたり、教師に高度の専門性を身につけさせる。 (3) 教員の意識改革を図る。 (4) 小・中・高等学校教育と大学教育との連携を図る。	○ 教員採用システムの検討 ○ 教育上の実践課題解決のためのチームづくり ○ 大学・教育研究機関と学校（小・中・高）との連携 ○ 現職教員研修の充実 ○ 教師と生徒とのふれあいの時間の確保